報告

二〇一九年度大会の概況

日本思想史学会二〇一九年度大会は、十一月二日（土）、十一月三日（日）の両日、茨城大学水戸キャンパスを会場として開催された。

第一日目は、「中世から近世へ—十六・十七世紀の思想史的課題—」をテーマにシンポジウムが開催された。

報　告

中世から近世へ—古典注釈の展開を通して　宗祇から契沖へ—　（明星大学）前田　雅之

朱子学的理の確立—十六・十七世紀の思想史的意義—　（愛知学院大学）下川　玲子

十六・十七世紀における『神皇正統記』の受容と正統論の形成　（國學院大學）齋藤　公太

コメンテーター

（学習院大学）兵藤　裕己

（ハイデルベルク大学）アンナ・アンドレーヴァ

司　会

（東北大学）オリオン・クラウタウ

シンポジウム終了後に総会が行われ、評議員より二〇一八年度事業報告および決算報告がなされ、それぞれ承認された。続いて二〇一九年度事業計画および予算案が提出され、それぞれ評議員案通り決定された

引き続き、大学会館にて懇親会が開催された。

第二日目の研究発表の発表者と発表題目は以下の通りである。

〈第一部会〉

研究発表

1、『永平清規』と『誡初心学人文』の比較—道元禅師と知訥禅師の「清規」から—　（東北大学大学院）丁　濟幀

2、生身の地蔵霊地の変貌　（高勝寺プロジェクト推進員）林　京子

3、貝原益軒の音楽思想とその特質—雅楽認識における熊沢蕃山との比較をとおして—

（東京学芸大学大学院）中川　優子

4、山鹿素行の「仕置」政治論―朱子学「治人」論批判の意義―　（愛知教育大学）前田　勉

5、『中臣祓詞蒙訓』からみる吉見幸和の神事観と学問考　（東北大学大学院）城所　喬男

6、懐徳堂学派の「敬」論―五井蘭洲と中井竹山を中心に―　（大阪大学）佐藤　由隆

7、本居宣長『直毘霊』解釈―「物に行く道」の到達―　（横浜市立大学共同研究員）吉川　宣時

〈第二部会〉

研究発表

1、供養と顕彰の思想―松本藩領貞享百姓一揆の記録を追って―　（岩手大学）中村　安宏

2、幕末維新期における儒学思想と池田草庵　（立命館大学大学院）古　文英

3、自己像／他者像としての菅野八郎―〈まなざし〉とイメージの主体形成論―　（一橋大学大学院）青野　誠

4、福沢の弟子にして新聞人・実業家・外交官・政治家、波多野承五郎　（静岡県立大学）平山　洋

5、加藤咄堂と品性修養―禅による感化―　（東北大学大学院）山口　陽子

6、中国仏教史の創出―境野黄洋の支那論に関する一考察―　（東北大学大学院）呉　佩遙

〈第三部会〉

研究発表

1、明治思想史テクストとしての一高『校友会雑誌』―「元気」論に立脚して―　（東京大学大学院）高原　智史

2、明治中期のナショナリズムと法学―牧野英一の思想形成―　（立命館大学非常勤講師）猪原　透

3、煩悶青年から中国研究家へ―橘樸の初期思想形成と日中の交錯する思想空間―　（京都大学大学院）谷　雪妮

4、大正期「日本主義」の検討―三井甲之と岩野泡鳴の提携から―　（筑波大学大学院）横川　翔

5、三上参次の歴史意識（承前）　（ノートルダム女学院中学高等学校教諭）池田　智文

6、猪俣津南雄の中国革命認識―その帝国主義論・日本資本主義論との関わりに即して―　（神戸大学協力研究員）黒川　伊織

7、和辻哲郎の武士道論とその思想史的位置づけ―批判的再検討の視点から―　（筑波大学大学院）李　璐

新入会員（二〇一九年十月以降承認。受付順・敬称略）

氏名	所属等（専門分野）
崔　民赫	韓国海軍士官学校（明治後期の国際秩序）
唐　利国	北京大学（吉田松陰、武士道論、儒学、思想戦）
岩木　勇作	創価大学（牧口常三郎の思想的研究）
王　小梅	神戸大学大学院（戦後日本思想における大衆論）
王　増芳	明治大学大学院（石母田正と国民的歴史学運動：一九五〇年代の光と影）
小口　康仁	一橋大学大学院（「武勇」の絵画化：「戦国合戦図屏風」と軍記）
白井　順	東洋大学（山崎闇斎派の文献研究）
髙田　宗平	中央大学（日本古代中世漢籍受容史・漢学史、漢籍書誌学）
谷口　太一	皇學館大学大学院（近代神道史・神道神学）
張　茜	大阪大学大学院（近世日本における中国文化受容）
馬場　秀幸	東北大学大学院（中世神道における死と生）
早川　敦	東北福祉大学（宗教学〈神話・儀礼〉、『正法眼蔵』研究）
韓　相允	東北大学大学院（現代日本におけるオカルト言説研究）
松本　航佑	皇學館大学大学院（国学思想の日本浪曼派における受容）
吉川　弘晃	総合研究大学院大学大学院（日本知識人の在外経験と対外認識）
龍　蕾	神戸大学大学院（梁啓超啓蒙思想における多文化構造）
林　卓俊	岡山大学大学院（日本における老荘思想の死生観の受容について）

【『日本思想史学』編集・公開規定】

一、日本思想史学会（以下、本学会）の学会誌は『日本思想史学』（以下、本誌）と称する。

二、本誌の編集には本学会の編集委員会があたる。

三、本誌各号の投稿論文に関する規程（「投稿規程」）は、各号ごとに編集委員会が定め、前号に掲載する。

四、本誌は、年に一回、毎年九月三〇日に発行する。

五、第五一号以降の本誌に掲載される記事の著作権は、それが掲載号発行の時点で本学会の会員資格を有する者の著作物である場合、本学会に帰属するものとする。

六、第五一号以降の本誌への非会員の寄稿については、編集委員会が、寄稿の際に、寄稿者から、電子公開の許諾等を得るものとする。

七、第五一号以降の本誌に掲載される記事は、発行翌年の一〇月一日に、本学会ホームページで電子公開する。

八、本誌第一～五〇号に掲載された記事の公開許諾については、別途定める。

【投稿規程】

『日本思想史学』第53号掲載論文の投稿を、左記の要領にて受け付けます。

一、応募資格　本会会員であること。ただし第52号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また、二〇二〇年度（二〇二〇年一〇月～二〇二一年九月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。

二、内　容　日本思想史学に関するもの。

三、書式・分量
・投稿論文の書式・分量は、A4判・横方向・縦書き・四〇字×三〇行・一〇・五ポイントで、注を含めて、一七枚以内とする。下部中央にページ番号を入れること。
・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。
・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、一頁あたり、二六字×二二行×二段である）。

四、提出書類
①正本一部、副本四部。
②正本には、日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのローマ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載した文書を添付すること。
③八〇〇字以内の論文要旨五部。

五、投稿締切　二〇二一年三月三一日消印有効（郵送に限る。宅配便の場合はこれに準ずる）。

六、送　付　先　ニューズレター第33号（二〇二〇年一二月発行予定）でアナウンスします。

＊完成原稿で提出してください。なお投稿原稿は返却しません。
＊論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。
＊本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。

【編集後記】

本号には、二〇一九年度大会シンポジウムの〈特集〉、第五回「思想史の対話」研究会にもとづく〈特別掲載〉のほか、〈投稿論文〉〈書評〉を掲載しました。

〈投稿論文〉の総投稿数は一四本（古代〇本・中世一本、近世六本、近現代七本）で、そのうち六本を掲載いたしました。前年と異なり、書式、会費納入などの面で投稿規程に違反している投稿者の原稿は六本に減少しました。とはいえ、次号に投稿なさる会員は、ぜひ投稿規程や編集・公開規定を確認の上でお願いいたします。

〈書評〉で取り上げる対象は、二〇一九年四月から二〇二〇年三月の間に刊行された会員の著作から選びました。執筆期間が決して長いとは言えない上、今年は例年と異なる諸事情がある中で、依頼した方々の多くが締切を守り原稿を提出して下さいました。心から感謝申し上げます。

皆様ご存知のとおり、今年は春先から新型コロナウイルス感染拡大の影響で、さまざまな出来事がありました。編集会議もやむを得ず遠隔で行い、原稿を作成して頂いた諸先生も研究室や図書館が使えない等の中でご苦労されたかと思います。それでもほぼ予定通りに刊行に至ったのは、印刷所も含め、関係各位のご協力の賜物かと思います。深く感謝申し上げる次第です。

編集委員長の活力低下を補うように、二年目で慣れてきた委員各位がしっかり役割を果たしました。一方で、二年連続で「研究史」等の掲載が出来なかったなど残念な点もありました。次期の編集委員にしっかり引継ぎをすることで、責を果たしたいと思います。

（S）